

## 大嘗祭と儀礼について

日本先史古代研究会会員 井上秀男

### (1)大嘗祭の沿革史

日本は古代から稲作を栽培し農耕文化を中心として、社会が発展して人口も増加し人々の生活が営まれて来た。稲作には水田への水の恵み、太陽の恵みを受けることが必要である。雨の振らない時には雨乞いをして雨の恵みを古代人は神に祈った。山や巨石を神体として拝み稲の収穫を祈った。人々の心が農耕儀礼にと推移していたと思われる。

私は以前NHKの番組放送で石川県能登半島の奥能登地方での昔から行われている民俗行事で「アエノコト」という田の神を家の戸主が苗代田に迎えに行き神を家に招いて戸主と神(田の神)との直会(なおらい)をして収穫の感謝と来年の豊作を祈る素朴な民俗行事を取材し放送していたのを知っています。この民俗行事は昭和51年(1976)6月に国の重要無形文化財の指定を受けている。

この様に稲の収穫祭は宮廷儀礼の新嘗祭(にいなめさい)又は大嘗祭(だいじょうさい)と共通していると考えられる。日本書紀の仁徳天皇期40年の頃には新嘗を「にわのあい」と訓じ、日本私記の神代には「にいのあい」と訓じられている。宮廷儀礼といわれている大嘗祭の儀礼が史料として明確に見えるのは平安時代になってから第40代天武天皇2年(673)に始まったとされ、天皇御一代にとっては重要な大礼、大祀である。延喜式には踐祚大嘗祭、踐祚大嘗会と記されていて、即位の儀礼で「令義解」(りょうぎげ)という著には天皇の即位を踐祚(せんそ)というように記してある。平安末期になってから大嘗祭から即位式はきりはなされ神器の授与が即位式の方へ移された。第85代仲恭天皇は父帝の順徳天皇より4歳で譲位され踐祚されたが3ヶ月で承久3年(1221)承久の乱が起きて即位・大嘗の儀を行うこともなく退位され天皇として認められず半帝(はんてい)と言われた。大嘗祭が朝廷の重要な祭儀として確立して以来の出来事であった。

室町時代の応仁の乱の起こる前年の文正元年(1446)に第103代後土御門天皇23歳で大嘗祭が挙行され在位36年間に及んだが翌年応仁の乱が起きてその後戦乱の世となって後土御門天皇の大嘗祭を最後として、江戸時代の東山天皇の即位にあたって貞享4年(1687)8月13日大嘗会が簡略な形で復興されるまでの240年間大嘗祭が中断されていた。東山天皇の次の中御門天皇の時は挙行されなかった。その次の桜町天皇の元文3年(1738)11月、8代将軍徳川吉宗の積極的な支援によって大嘗祭の費用として幕府から下された御下行米(ごげぎょうまい)は前回より千石増加されたことが鈴鹿家文書の元文3年の大嘗会御下行帳に見える。

その後明治になって明治4年(1871)大嘗会は東京の皇居吹上御苑を祭場とされた。明治42年2月11日に即位礼、大嘗祭の典範として登極令が皇室第一号をもって公布されている。本文は18ヶ条で附式は第一篇は踐祚一式、第二編は即位礼及び大嘗祭一式にわかれ32項から成っている。大嘗祭は大正、昭和3年10月、平成2年11月22日現在の天皇の大嘗祭が挙行されている。宮廷儀礼の大嘗祭も激動の時代の流れの中を伝統的な儀礼として伝えてきていると考えられる。

## (2) 鈴鹿家文書と大嘗祭の儀礼

鈴鹿家は江戸時代の貞享4年(1683)東山天皇の大嘗祭から幕末まで神祇官として奉仕していた関係で大嘗祭の祭儀の詳細な記録史料を保管されていたのである。高鴨神社(奈良県御所市)の宮司鈴鹿冬三氏蔵の大嘗祭に関係した資料を鳥越憲三郎氏に鈴鹿冬三氏が託された。その後鈴鹿家文書史料を参考にして鳥越憲三郎著の「大嘗祭」1990年6月30日初版発行。又有坂隆道氏、島田竜雄氏と共編著で「大嘗祭史料」鈴鹿家文書・柏書房刊平成2年1月に刊行されている。今回この紀行文を書くのに大嘗祭の本を拝読し文面で参考にさせていただいた。

大嘗祭を挙げる場合に先立つ儀礼として国郡卜定(こくぐんぼくじょう)が行われ、その年の悠紀(ゆき)主基(すき)にあたる国郡を卜部(うらべ)亀甲を灼(や)いて占いを定めることである。米の収穫時に悠紀主基の両国へ抜穂使(ぬきほし)が使わされて斎田(さいでん)の米・粟で大嘗祭の儀式に用いる黒酒・白酒・御飯・御粥(おかゆ)を作るのである。卜定(ぼくじょう)で亀甲を灼くのは後のことで古くは太占(ふとまに)といって牡鹿の肩骨を焼いて占っていたことが日本書紀古事記に記されている。他に儀礼として荒見川祓(あらみがわはらえ)、小忌卜定(おみぼくじょう)))、御禊(ごけい忌火御飯(意味備中の恩い))由奉幣(よしのほうへい)等の儀礼が行われると書かれている。詳しい説明文は割愛させてもらい、項目だけ上げることとします。大嘗祭の挙行されるまでの、先立つ儀礼についての内容は鳥越憲三郎著「大嘗祭」を参照してください。

## (3) 大嘗祭和歌について

大嘗会(だいじょうえ)和歌には風俗和歌と御屏風和歌の別がある。大嘗会には古来から和歌が詠進されている。大嘗会和歌といわれ「古今集」巻20には五首入首し、その中に仁明天皇天長10年(833)度主基方の「真金吹く吉備中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」という和歌があり古いといわれている。この和歌は備中が大嘗祭の時に主基方として選ばれた時の和歌と思われる。悠紀主基の両国から献上された屏風が悠紀の帳、主基の帳として、辰巳の両日に紫宸殿に飾られる。その屏風には屏風歌十八首が色紙に架かれ六枚折三双の屏風貼られる。両国の名所を選んだ地名が「悠紀所風土記・主基所風土記」として10月上旬に行事弁のもとに届けられる。その風土記は悠紀・主基それぞれの歌作者に渡され、作者はその中から適当な地名を選んで屏風歌十八首を詠進する。このように大嘗祭会和歌にも順序があってそれに従って進行された。元文3年の桜町天皇の場合は10月9日に風土記から風俗歌十首が前記の人達によって詠進される。その風俗歌は行事弁から楽所に届けられ曲譜が付けられ、そして辰巳の両日悠紀主基二国の国司に率いられた人達によって歌舞される。

## (4) 元文3年(1738)大嘗会写本に関して

今から22年も前になる平成2年11月と記憶している、現在の天皇の大嘗祭が挙行された時である。家の郷土資料を整理していたら和紙で42枚に書かれた一冊の和本が目にとまった。表紙には「元文3年11月大嘗会式全二巻下」と書いてあった。後日図書館で調べてみると、江戸時代の桜町天皇の大嘗会の挙行された元文3年(1738)11月1日の大嘗会の記録の写本であることが判明した。

写本の内容は前半は天皇に献上する米の産地悠紀(ゆき)主基(すき)の両国の地名を読み込んだ屏風和歌がきざされておき、後半は大嘗祭に携わっていたと思われる公家(くげ)の日記の写しで祭儀のやり方や用意する道具類、服装等についての記録が書かれているものです。上巻が欠巻となって

いるのが残念ですが、時々古本屋等で探すこともあります。中々見当たりません。昨年自宅が台風の被害にあって蒐集資料や本類を友人の倉庫へ映して保管しているのですが、最近整理をしていたらダンボール箱から大嘗祭の資料が出てきたので今回の“きび考”の寄稿文に取り上げて見た私大です。

- 参考文献 ○大嘗祭(鳥越憲三郎著) ○大嘗祭の研究(岡田精司編)  
○大嘗祭史料 鈴鹿家文書(和本) ○古事類苑 神祇部